

アドヴェント第三 ルカの福音書 2 章 6-20 節「大きな喜びを告げ知らせる」

小池 宏明 牧師

イエス様の誕生の知らせを最初に聞いたのは、ベツレヘム郊外で野宿していた羊飼いたちだった。(8-12 節) 当時の羊飼いは、迷子になり易い羊を養い育てていたため、安息日を守ることができず、ユダヤ社会から冷たく扱われていた。救い主誕生の知らせは、そんな羊飼いに、最初に伝えられた。こうして、主イエス様は、どんな人にも、すべての人々のために来られたことが明らかになった。

*ローマ皇帝を凌ぐキリスト

今回は、10 節の御使いの言葉「大きな喜びを告げ知らせます。」に注目する。最近の研究では、この言葉はもともと、ローマ皇帝の誕生を知らせる時に、帝国内で触れ回られた言葉とされている。直訳は、「大きな喜びを福音として伝える」となる。ローマ皇帝の誕生が福音(良い知らせ)として告げ知らされた。加えてローマ皇帝には、元々「救い主」とか「主」という称号も使われていた。ルカの福音書に記録されている主の使いの言葉は、当時の絶対的な権力者であり支配者であるローマ皇帝に対抗しているのだ。主の御使いは、主イエス・キリストのご誕生が、時の最高権力者ローマ皇帝をものぐ、真の救い主、真の主なる神様の誕生なのだというを高らかに宣べ伝えている。このことは驚くべきことだ。そして、今や「救い主」と言う言葉も「主」という言葉も、そして「福音」という言葉も、主なる神イエス・キリストとその御業を現わす言葉としてのみ使われている。私たちの教会のかしらイエス・キリストは、どういうお方なのか! もう一度確認しておこう。この世の権力者など問題にならない。彼らをご自身の足の下に置いている絶対的なご支配者が私たちの主イエス・キリストなのだ。

*賛美しながら生きる生活

さて、御使いたちの預言どおり、赤ちゃんのイエス様にお会いして羊飼いたちは、どうしただろうか? 20 節「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」羊飼いたちは、その境遇が変わったわけではないが、預言の御ことばとおりに主イエス・キリストと出会ったことによって、主なる神様をほめたたえる者になった。私たちも神様を信じ賛美したからといって、昨日と同じ日常が明日も続くかもしれない。しかし、今日、私たちのために来られた、私の救い主、イエス・キリストがおられるから、私たちは安心して、平安の内に、それぞれの持ち場へと旅立って行ける。この世の旅路を勇敢に歩む者でありたい。